三河アララギ

２０２４年 令和６年１０月 葉月（はづき）

十　月　号

第 七十一 巻　第 十 号

ニューヨーク日記（216）

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

JAPANESE SUMMER FIREWORKS

Blue Shoe Diaries

日本の夏といえば、やっぱり花火大会！全国で開催されるけど、人混みの中でベストな場所を見つけるのはほぼ不可能（特に暑い夏には！）。でもなんと今年の夏はそれができちゃいました！江東花火大会で予約済みのベンチチケットをゲット！快適で特等席からの眺めを楽しみました。しかも、花火がすぐ近くでドカーンと上がるから迫力満点。そして東京の中心からちょっと離れているおかげで、混雑も意外と控えめ。また行きたいから内緒にしておきたいかも！

Summer in Japan means one thing: fireworks! They're everywhere, and finding that perfect spot in the crowd is half the adventure (especially in the sweltering heat!). But guess what? We nailed it! At the Koto Firework Festival, we snagged a reserved bench—yes, comfort and a front-row view! Being so close to the action, the fireworks felt larger-than-life, bursting right before our eyes. And the best part? It's just far enough from central Tokyo to keep the crowds chill. It's like discovering a hidden gem in plain sight!

目次

第七十一巻第十号（通巻八五〇号）

表紙・樹皮を叩いた紙　アフリカ系（1）
ニューヨーク日記(216)　Blue Shoe（2）
歌集　わが冬葵　御津　磯夫（4）
歌集「草々」　今泉　米子（5）
三河アララギ歌集Ⅴ　大須賀寿恵（6）
三河アララギ歌集Ⅶ　夏目　勝弘（7）
『歌集　八千代』　岡本八千代（8）
三河アララギ歌集Ⅵ　弓谷　久子（10）
なお遠く　今泉　由利（12）
百日紅咲く　安藤　和代（14）
光の中より　山口千惠子（16）
ベロ藍　杉浦恵美子（18）
明日を待つ　伊藤　忠男（20）
庭中改修（その七）　白井　信昭（22）
涼新た　矢崎　直人（24）
『ことよせ』　いーはとぶ　牧原　正枝（26）
森　厚子（26）

現代学生百人一首　東洋大学
細貝　杏衣（30）
江澤　穂（30）
梅澤　碧葉（30）
鈴木　優紀（30）
渡辺　悠貴（31）
篠塚帆乃佳（31）
小林　直史（31）
大谷　健介（31）
植村　公女（32）
木村　歩歩（32）
今泉　如雲（32）
矢崎　直人（33）

『俳句』
水野　絹子（27）
牧原　規惠（27）
稲吉　友江（28）
鈴木美耶子（28）
岡本八千代（29）
『酔いの徒然』（150）　丸山酔宵子（44）
「夜が明けた」　高橋　育郎（46）
絹の話（167）　今泉　雅勝（48）
「江上浩二の独り言」　江上　浩二（50）
初狩便り35　花野みぷり（52）
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬　本田　勇気（54）
康鍼治療院　玄　翁（56）
群飛赤卒　殿山　木風（58）
編集室だより　今泉　由利（60）
「三河アララギ」について（62）

今泉　由利（33）
川口カルチャー受講者自作自詠俳句集（34）
折々の詩（八）　ふじのけんじ（36）
五感を澄ませば(28)　杉浦恵美子（38）
附録（二十八）　矢崎　直人（40）
『秋の子』　中屋　保之（42）

歌集　わが冬葵

御津磯夫

かまきりは青きままにて輕々し山菅の葉の上に歩まず

青々として立ちそろひたる水仙のいまだ蕾の見えぬすがしさ

黄の蝶は忽ち吹かれ隱ろひぬ木の葉しきりに散りゐる奥に

胸さわぎしつつつかれて眼をひらく光くぐもる黄昏の中

熱に臥て眠りねむらず夜もながし誰れも知らざるわが子守唄

われをめぐる草木も石も金色（こんじき）に混槃（ねはん）にあらず黄昏のとき

夕百舌鳥の高音に書（ふみ）を閉ぢにけりをさなこころははや五十年

秋の日のこの世のものの音聽きて泪のたまる老の眼を閉づ

菟足（うたり）の宮の新收藏庫ひらかるる病後のわれの歩みはじめに

またも病みて殘りしいのちに參り來ぬ大般若經六百卷に眼を洗ふ

歌集「草々」

今泉米子

雌松立つ雲井の山の埴土にちりばふは天平の瓦のかけら

宮阯をくだりゆきつつ山砂利にまじれるものの布目をぞ言ふ

野ざらしに積上げし火鉢の間ゆき灰釉かかる信樂の壺

タマの木はタブの木または犬楠とききて忘れぬ窓鏁すときに

今晩のカロリーは少し足らねども鰺の乾物はあした食ふとい

感謝狀屆けられたるタベにて秋の淺蜊の味うすき汁

いつよりかインコアナナスの一鉢ありカーテンを閉ざすその薬に觸れて

子の名札掛かれるドアに歩み來つ死つづく汝にまたわが逢はむ

聲にならぬ唇の言葉に母われを言ひしといふよ甦り來よ

檐かげに一枝なほも咲くダチュラ年越に子らの歸り來む日に

三河アララギ歌集Ⅴ

大須賀寿恵

へちま忌と思ひつつゐし夕べにて遅きへちまの明日咲く雌花

洗はむとする体操服のポケットより出でたる小石は子の宝物

夏休み過ぎてふた月虫籠に首なくなりしくわがた二匹

水霜の今朝あたたかし大輪の菊の花よりも陽炎の立つ

汲み置きの馬穴の水を横ぎりて流れゆきたり冬雲ひとつ

坐り葉となりし苺の緑葉はいつしか紅く朝々の露

十日余り早き今年の初氷庭の水槽に解けはじめたり

やぶ梅の枝つたひつつ遊びをり胸毛美しき放れ文鳥

夕餉終へてひとりのぼれるベランダより低き鋭き二日眉月

しろじろと咲き垂るる馬酔木の花に来て背のびし啄む二羽の目白は

三河アララギ歌集Ⅶ

夏目勝弘

わが窓より手を差しのべて山萩の柔き若葉に触れてみにけり

窓よりの薄日を右の頬に受け目を閉ぢて息を調ふる

目を閉ぢて窓の方を向きてをり雲の動きを感じてゐたり

窓近くを飛びゐる揚羽の羽音など聞かむと耳を止めてゐたり

自づから窓に向かひて坐りをり窓あることは楽しかりけり

向かひゐる窓を横切れる黒きもの悪魔にあらず今年のつばめ

内側より外を見るが窓ならむ下心あるは外より覗く

道に沿う家並のなかを歩みゆく窓より覗きたき家のありぬ

新築の窓はことごとくアルミサッシ家に温もりのなくなりにけり

わが窓より入りてくるは日の光開くれば風の抜けてゆくなり

『歌集　八千代』

蒲郡　岡本八千代

まなこ開きまたつむりてはゐるのみに盲腸手術の一日過ぎゆく

わが病室のカーテンの隅より見ゆる家もいつしか灯を消してしまひぬ

音あらききのふにつづく春の雨二〇四号室にわれのみひとり

新学期を病みて休みて生徒らに今年はなづなを教へずに過ぐ

新学期始まる今日は入院のわれを見舞ひて来る人のなし

盲腸炎全快してより一ヶ月日教組青森大会にわれは出で行く

女教師のわれら六人の寝台車グリーンのカーテンに夜は仕切らる

寝台車の中段の寝袋にわが入りてやうやくわれのひとりになりぬ

常盤線の夜行列車に揺られつつ勿来の関もいつか越えたり

明け初めし浅虫のホームに降り立ちぬ青き渚は前に広がる

浅虫の温泉街のふた側に丈長きたんぽぽ群がりて生ふ

「乙女の像」にゆかず我のみ残りをり十和田湖畔のナナカマドの下

学校参観に来るけふの日の日直にスリッパ五十足をわが並べおく

梅雨の雨しきふる中を学校参観の牟呂の五十名バスより降りくる

はなればなれに特別教室十あれば鍵の束鳴らしわれは巡りゆく

三河アララギ歌集Ⅵ　日照雨

豊川　弓谷　久子

玉虫色の輝く編み糸細くして忽ち夏のセーターとなる

蒲公英の白き穂絮の並び立つ人住まぬ隣家の月光の庭

春雷の一夜は明けて柿若葉の黄の色かがやく眩しきまでに

指先のかすかに青に染まりつつ藍染の糸にて夏服を編む

南部鉄の我が風鈴に雲のかげながるると書きて短冊を吊る

霧雨のまだ降りながら御津山の上より梅雨の空晴れてゆく

亡き夫と共に草刈る夢見しと笑みつつ言ひき晩年の母

毛糸巻くかせくり機よりの小さき風けはひなきわが頬に冷たし

父母の法要の僧を待ちてをり母似の兄と父似の姉と

皺深き顔がテレビに映りをり兄は少女歌舞伎の創立者とて

白き花の小さき父子草の一もとを残して夏草を引き終りたり

我が故郷はあの峡あたりか雨上がりの観音山に白雲なびく

こめと言ふ名の母なりき雪柳をこめ花と呼びつつ喜びたりき

敦煌の辺りが産地かと思ひつつわれは編みをりトルファン綿を

白と黄の蝶舞ふ如き忍冬の花を楽しみつつ杣道を歩く

なほ遠く

東京　今泉由利

「焦るな」「怒るな」「成張るな」常の心を保ちをりつつ
厚き雲かすかちぎるる所より地球を覗く日本が見ゆる
一億年の寿命といい星昴五千万年を過ぎたることよ
ほんのりと明るみきたり安堵していま再びの眠りに入りぬ
遠く遠く行くかのごとき心して山の手線の五駅ばかりを
地球なる半周よりもなほ遠く遠くへ遠くへゆきにしことよ
はるばるとはるばると行きにけりパタゴニア大地地果つるところ

高野山宿坊に目覚めしことありき蓮の花は金に咲きをり

五億年いとも容易く三葉虫化石と堅くなりたることよ

ほんのりと表面張力零さぬように神酒は神の御前に

稲妻の形してをり紙垂真白ここよりか神神様の域

飛行機のエンジン音を同化してはるばるきたりぬパタゴニア大地

父を亡くしぬ母も亡くしぬひとりきり幾多の本を残し下さり

過ぎゆきし千年の見ゆる神々し木目は雲中菩薩に至る

ひと夏をおほきく栄へしカラスウリまた来年の真白き花を

百日紅咲く

豊川　安藤和代

バイパスの行き交う車を見守る如猛暑に凛と百日紅咲く

泣いたとてどうにもならぬ逆縁の息の初盆に灯す提灯

夢であれ夢であれよと未だ思う真実悲しふる蝉しぐれ

「コーラが飲みたい」それが最後の言葉ゆえ霊に供うコーラ三本

御先祖様甘辛両覚みえるゆえ御供物も忙しくあり

能登輪島秋田山形の人思い頑張れている今の私

「白髪の私が誰かわかるかな?」両親に問う盆の二日目

猛暑ゆえ鉢物花もぐったりとお水あげても起きようとせず

素麺派冷麦派いてそば派いる休日昼餉ジャンケンで決め

山茶花に巣などあるのか一日を足長蜂の出入り激しき

暑さゆえタンクトップで家事をする「セクシーじゃん」と孫に笑わる

夕焼けが憎らしい程きれいです明日の暑さよ心混濁

来る年も元気に盆を迎えたし御先祖様に願い祈れり

夕暮れの空蝉ひとつ軒下に正しく曲りし足の悲しく

この暑さいつ迄続く手後九時の生暖き庭に佇む

光の中より

豊川　山口千惠子

重き荷物われより受けとり前を行く夏の日暑きスーパー駐車場

腕の蚊をたたきてつぶす滲みたる赤き血の色われの血の色

咲きてゐるグラジオラスの赤き花夏の出の中より切りとる

瓶に挿すまっ赤な花のグラジオラス冷房涼しき部屋の窓辺に

敷石の間より生えし日々草旱天続く庭に花咲く

今日もまた花一輪の日々草磚の間に生えて花咲く

訪ひ来る孫娘とその婚約者を待ちつつ活ける小瓶に小菊

厨辺にガラスコップを洗ひつつ帰り行きたる若きら思ふ

背の高き青年なりきフィアンセは二人の道のりこれから長し

鮮やかな千日紅を携えて祖母と行きし夏の日の墓所

槙垣にからみし蔓をたぐり寄す音たて落ちくる巨き冬瓜

表面の細かき刺とげ手に痛し拾ひ持ち上ぐ冬瓜重し

受皿の水に坐れる小蛙を今朝も確かむ朝顔の鉢

今日もまた暑き日なりと窓を明くる蝉の姦し隣家の庭に

蝉のなく声の聞こえずなりにつつ今年の暑き夏過ぎてゆく

ベロ藍

蒲郡　杉浦恵美子

会場の無数の藍色眼を射抜く広重展に一歩入れば

ベロ藍と呼ぶらしこの青この深さ浅葱金春及びもつかぬ

ベロ藍は十八世紀ベルリンの染料業者の偶然の調合

ベロ藍と出合ひて後の広重の風景画への開眼に合点

ベロ藍の広重描く空海夜の青さ無限に胸に染みゆく

会場を出ても瞼にベロ藍の残像帰宅してまで続く

広重の最晩年の雨のすぢ大はしあたけの夕立図を見る

隣り合せ摺りの違ひにときめけり大はしあたけの夕立二枚

後摺りは二艘の舟が消えてゐる蔵も暈せる修正の妙

広重の赤羽根之夜雨の雨のすぢは初期段階かあまりに太い

建築家隈研吾氏は着想を大はし夕立図より得たりしとぞ

物語が隈氏ならずとも浮かび来る大はしあたけの夕立図から

本当は朝から出掛ける筈なりきノロノロ台風行先にあり

広重展見たいなどとは些細かしら足止め食らふ多様な人々

世界一便利な乗り物新幹線されど災害如何ともせず

明日を待つ

大阪　伊藤忠男

他の心分かる種のみ生き残る進化の歴史は共生にあり

集いから群れ経て社会国造る人ある故は友のある故

昨日に学び今生き明日期待歩み続けるこの先の先

地下鉄で予習せねばと孫の本開き読むうち乗り過ごすなり

串団子買って帰るか今日の宵孫の数学見る日なりとて

暑さ耐え通う毎日限界か息切れするや駅の階段

ネクタイで心引き締め戸口出るそれも過去なりクールビズにて

変わりなき暑さに豪雨激しこと夏が過ぎても異常は残る

この夏の異常は昨年上回る異常の上の異常なりけり

この酷暑サイレントキラーと誰や言うこの地滅びる予兆なるかな

雲一つ無き朝明けて静かなり午後降る豪雨知る由も無し

あれもそれこれもするぞとマニュフェストどれも叶わぬマガフェストなり

いちごの葉枯れて萎れる日の光耐えれぬ暑さ明日も変わらぬ

残暑とは言えぬ本番真っ盛り秋風恋し夕方の空

気が抜けぬ真夏の暑さなお続く歩く人の目虚ろなりけり

庭中改修（その七）

豊川　白井信昭

家近く養魚場より汲み揚げる水激（たぎ）つ音今も昔も

入出口勾配なくして支柱二台豆板囲い一列二段

支社台二つの間（あいだ）補える中間支柱の二本を加う

入出口囲いの補強と豆板の未だ使える三枚挿入

中間の支柱の間を埋め合はす柱とブロック踏台なせり

み社より祭りも近い聞こえくる七福神踊笛拍子木の音

恒例の御馬の祭り笹踊七福神踊四年ぶりを

生垣奥山吹一本黄の花狂い咲きおり淡暑の下(もと)に

午後よりの西日除けとて垣根下ベニヤ板たてブロックを削る

間近にも水道標際ハンマー持て基礎響かせて標傾く

生垣に去年(こぞ)にも増して蕾つけ百日紅(さるすべり)根方桃に咲き初む

豆板の寸法厚さ五センチ巾三〇センチ長さ一メートル

水漏れの箇所つき止めて少しずつ隙間埋めゆく脆石粒石

いつまでも咲いてほし百日紅(さるすべり)に彩る今が見頃か

残したる花壇の土の再びを花壇に入れて一杯とする

涼新た

埼玉　矢崎直人

鳴る音に頭巡らす花火かな見当違いに花火の揚がる

見詰めつつ見詰め続けず距離を取り様子を見てる見守っている

赤い眼と赤い脚もつ鳩がいて秋暑い中とことこ歩く

涼新た重くも軽くもなる身体夏の疲れと暑さやわらぎ

朝顔や一輪一輪の顔が咲く一つ一つが私の顔と

元浅間の大きな梨をもらいけり手に余るほど大きな梨を

稲刈りや青空の下散歩道手を引き並びあいさつをする

ありがとうが日々飛び交える職場をに働き甲斐を見つけていたり
元あった所に物を片付けて私の心を落ち着かせてみる
その全てチャンスに捉え直そうとうまくいってもいってなくても
見えて来る話せることでその世界僕の向き合う現実を知る
そこまでは考えなくても難しく今出来る事今やれる事
両肩にインコを乗せて自転車をこぐ人のいる街の風景
独り言こぼれ落ちたる夜長きな虫の声音が聞こえてくると
繋がりを繋げる人に目に見える目には見えない繋がり見つけ

『ことよせ』

西浦公民館　いーはとぶ

梅雨はれま屋根屋さん三人うへにしたに手順すすむかラジオがつきぬ　牧原正枝

真夏日に屋根の修理はすすみゆく十時の休憩笑ひ声聞こゆ

雨漏の庇をぐるりと修理する職人三人はそれぞれの場所

梅雨明け前に真夏日の気温の中、屋根屋さんの仕事をハラハラしながら見上げ無事に修理を終えて頂きました。

慣れねども芝刈り草刈り滝の汗小一時間にてけふは終へやう　森厚子

友にきき除草人工芝を買ふこれにて歩ける小径にせむと

梅雨の間につひに成るかな小径通し人工芝敷き完成とする

玉砂利と敷石の小径が、今や伸びた芝と百合に覆われて…。そこで一念発起。通れる小径の完成です。

木も生えず風吹きすぶ佐渡の涯スコットランドのやうだと夫(つま)は　　水野絹子

吹きすさぶ風に煽(あほ)られグリーングラス泛びくるかなトム・ジョーンズの歌

むき出しの松の根岩を抱へ込み波に洗はれなほ空目指す

佐渡の北端、弾崎灯台周辺の景色を見て、夫と私の思い浮べた物の違いが面白く、短歌にしてみました。

背の高き孫のお古の自転車なり貰ひて家族でサイクリングへ　　牧原規惠

雲湧きて近くに雷轟けどわれの畑に雨は降らざり

集ひたる公民館の発表会演者はどなたも最高なりて

何週間も高温が続き、雨一滴も降らず、水やりも焼け石に水。このような気候が毎年続き続くのでしょうか。

三食を作りてもはや五十年今日は手抜きの豆腐にしやうか

畑中に咲きゐる向日葵思ひ出づソフィア・ローレンの哀しき映画

向日葵は希望湧きくる花なるもされど哀しきウクライナの花

昔観た映画が思い出されます。ここにも戦争によって引き裂かれた男女が。早く世界平和になる様に。

稲吉友江

誰も住まぬ実家の庭の草の陰クリスマスローズ緑艶やかに

この食卓息子らがゐて丁度良き今宵も二人向き合ひてをり

風鈴がコロンコロンと風に鳴る耳をすませてひとりゐる午後

息子たちがいて、皆が寄り来て、にぎやかだった食卓。今日は硝子の花瓶にヒベリカムの赤実を生けました。

鈴木美耶子

勤めやめて忽ち一年の過ぎゆけりくれなゐの濃き今年の紅梅

秘めおきし紫縮緬のわが羽織広げ見せをり嫁ぎゆく娘に

後生大事に蔵ひておきしわが羽織娘と着てみる代る代るに

岡本八千代

現代学生百人一首

東洋大学

点Pさんぐるぐるまわる図形上楽しむあなたと苦しむ私

埼玉県立川越女子高等学校２年　細貝　杏衣

看護師の祖母が引退「おつかれ」とハグしたいのをはばむ世の中

埼玉県立川越総合高等学校３年　江澤　穂

コロナ禍で日々マスクつけ気がついたプリクラよりも盛れる気がする

埼玉県立松山女子高等学校２年　梅澤　碧葉

三〇〇年時空をこえてバロックを奏でる僕にバッハがコケる

市川中学校２年　鈴木　優紀

人が増え広い教室狭くなる終わりを告げた分散登校

市川中学校２年　**渡辺　悠貴**

コロナ禍で出かけられずに家籠る一度も着ない夏服たちと

敬愛大学八日市場高等学校３年　**篠塚　帆乃佳**

オンライン画面とマイクで授業中下から大声ごはんですよ

芝浦工業大学柏中学校２年　**小林　直史**

本屋行き好きな作者の新刊を買い読む時の至福の時間

芝浦工業大学柏中学校３年　**大谷　健介**

『俳句』

ひとり居の父の写メール甲虫　植村公女
沈黙の真中よぎりし梅雨時雨
炎天や砂上わたしと鳥の影

農作業する人もなし百日紅　木村歩歩
片蔭やベンチひとつに我ひとり
仰向いて空に還るか溝の蝉
友去りていつまた会える時計草
ひぐらしの友を呼ぶ声掠れゆく

ほの赤き恋空といふ早生林檎　今泉如雲
乙女座は西に沈むやねぷた果つ
秋潮や河原左大臣坐像

秋暑し眼と脚赤き歩く鳩
朝顔や一輪一輪の顔が咲く
元浅間大きな梨をもらいけり
繋がりを繋げる人に秋立つ日
涼新た重くも軽くなる身体

矢崎直人

花びらに露を宿してお茶の花
赤点点花軸高し水引草
見ゆるもの健やかにして秋うらら
雲霧雨地球の水の清酒成る
一杯の水の涼しい江戸切子
地球なる引力見えて一葉散る
名月を独り占めしてひとり酒

今泉由利

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

木風

日本は豊けき国ぞ田のみどり
ふる里は如何にかあらん夏の雲
木陰より無情にながむ雲の峰
少年が目を追うて聞く蝉の声
日暮れをば惜しんで飛ぶよ赤とんぼ

雄山

墓参り暑さで花も頭下げ
カルチャーで吟友いない秋さびし
年老いて錠剤ふえる食後かな
家が建ち花火が出来ぬ祭りかな
カルチャーで感謝の吟を亡き友へ

白菊の遺影に向かい弔吟のこえ　恵風

猛暑日に熱気と興奮阿波おどり

真夏日に親子で吟じる伝統文化

月沈み流星見上げ願いごと　郷泉

秋時雨（あきしぐれ）金色（こんじき）あとに月見坂

空青しリュウゼツランを仰ぎ見る　菱泉

夏の風ボートで競う大学生

ひぐらしが夕日に泣くよ寺の鐘　篤風

折々の詩（八）

ふじの　けんじ

台風

木が　ざわざわ　ざわざわと
動き出した
となりの木も　ざわざわ

おい　何かわくわくしてきた
えっ　お前もか
俺も何かわくわくしてくるんだ
だってこういう時　きまって風が
いいにおいを運んでくるんだ

お前もそう思うか
俺もいいにおいだと思って
いつも胸いっぱい　吸うんだ

何か聞いたことがあるけど
そのにおいって海っていう所から
来ているらしいよ

そうか　多分見ることはできないけれど
においでどんなところかわかるんだ

きっと広くて　いろんなものがあって
いっぱいこのにおいがかげるんだなあ

何のこと　と　鳥たちが
こずえにこしかけ　話を聞いている

そうだな　風が止むまで　みんなここにいるといい
それまで　海の話をしようか
そうだな　このにおいはね・・・

ざわざわ　ざわざわ　わくわく

五感を澄ませば（28）

杉浦恵美子

勇気を与える

「私はどうも、スポーツ選手やタレントが自分の活動を『見た人に元気や勇気を与えたい』的なことを言うとスッと冷めた目で見てしまう。与えるって感覚は自分を上に置いて施す側と認識してしまってるから出る言葉に感じるのよね。（X@tagamekamo2022.8.6）

ネットでこの記述を見つけ我が意を得たり。

「勇気を与える」こんなふうに言うのは大抵若い人で、年配者（であるわたし）は、「大きなお世話。与えられる謂れはないわ。」と、むっとします。

けれど、若い世代には、今やこんな言い方に何の違和感もないのかもしれませんね。

これって敬語の混乱によるものだと思われます。

「与える」という語は、本来は単に客観的な叙述表現ですが、相手を意識する場面で使われると「上から目線」として聞こえてしまいます。敬語の一種、いわゆる尊大語。

ではどのように言い換えればよいのか。

「勇気を差し上げる」

「勇気をお届けする」

などとすれば、上から目線ではなくなりますが、あまり馴染まない表現のせいか使われている場面をみたことがありません。

話を敬語に戻しましょう。

敬語って使い方が面倒だと思われる方が多いかもしれませんが、実は仕組みは簡単です。

それは待遇表現であって、相手には敬意を示し（尊敬語）、自分（身内）はへりくだる表現（謙譲語）を使えばよいだけのこと。

（敬語の種類には丁寧語、美化語というのもありますが、ここでは置いておきます）

ただ、どれが尊敬で、謙譲なのかわからないと誤用は避けられません。

その上、現代は、尊敬と謙譲との使い分けもさることながら、自他の区別もなくなっているのでは？（だから余

計に混乱）と首を傾げる言い方が大手を振っています。

・ペット、子供、植物におやつや水を**あげる**（これこそ**与える・やる**でしょう）

ネットを見ていたら「筋肉を伸ばして**あげ**ましょう」とありました。筋肉様？

・ペットに対して**ひとり、ふたり、男の子、女の子**（人間並みの扱い＝擬人化）

犬や猫の人気動画を見ているとまるで人間が話しているような字幕や吹き替えがつけられています。

・（大人なのに身内を）**さん付け**

・**ございます、ございません**の使い方

先日新幹線に乗ったら、停車駅が近づいたとき「お忘れ物は**ございませんか**」とアナウンスがありました。

これは「ありませんか」を丁寧に言おうとした言い方で、一般によく使われていますが、私には違和感があります。

しかし調べてみると、この言い方は間違っていないと言う説もあります。

が、これを「『お忘れ物をなさいませんよう』とした方が**自然な日本語**」という意見を見つけ、そう私の違和感はこれだったのだ、と思い至りました。

「申し訳ございません」→「申し訳ないことでございます」の方が自然なように。

つまり元々の慣用句を崩して造語しているから変な感じがしていたのだと。

言葉は変化し続けるものだから、敬語もまた変化して行くでしょう。現に日本に暮らす外国人にとって、敬語の存在が日本語の理解に支障をきたしている点もあるとか。

それでも関西の方が誰に対しても「～はる」と言うのを聞くと、ほっこりして、このような敬語はいつまでも残ってほしいなあと思います。

思ひ出す度に敬意が湧き出づる我が師逝かれて丁度一年

附　録（二十八）

矢　崎　直　人

秋暑し眼と脚赤き歩く鳩

残暑が厳しい日々が続きました。ふと目の前を歩く鳩に目が向きました。暑さを感じさせず歩いている鳩の眼は赤く脚が赤い鳩でした。

赤い眼と赤い脚もつ鳩がいて秋暑い中とことこ歩く

朝顔や一輪一輪の顔が咲く

朝顔が咲く季節になりました。フェンスに赤い朝顔や青い朝顔が咲いていました。色ががうすくなっていってグラデーションになっており、そのさまが一輪一輪違って別々の花の顔だと主張しているように見えてきました。

朝顔や一輪一輪の顔が咲く一つ一つが私の顔と

元浅間大きな梨をもらいけり

元浅間の自治体の方から梨をもらいました。段ボール一杯に売り物にはならなかった梨で、大きさが不ぞろいでした。その中から手に余る程の一番大きな梨を選んで貰ってきました。みずみずしい美味しい梨でした。

元浅間の大きな梨をもらいけり手に余るほど大きな梨を

涼新た重くも軽くなる身体

日中はまだまだ暑い日が続きます。夏の暑さに耐えた身体に疲れが出て重いだるさを感じることがあります。が、それでも朝晩は秋らしく涼しくなって来て、足取りは軽くどこかに出かけたいという気持ちにもなります。風に秋の声が聴こえてきます。

涼新た重くも軽くもなる身体夏の疲れと暑さやわらぎ

『秋の子』

中屋保之

作詞・サトウハチロウ、作曲・末広恭雄（元・東京大学農学部水産学科教授）の〝すすきの中の子 一、二の三人〜〟で始まる童謡が好きだ。題名が「秋の子」とは知らなかった。

昭和二十年代半ば、幾らかはトンボやバッタなどが飛び交う原っぱやトウモロコシ畑が幼少期の記憶に残っている程度で、この詩にあるような「里山」は知らない。が、何故か目の前に情景が浮かぶのである。

強いて言えば、幼児期から毎年両親の故里、富山でひと夏を過ごしていた体験が影響しているのかもしれない。東京ではお金を出さなければ拝めなくなってしまった蛍は、蚊帳の中まで飛び込んできてくれたし、近くの河原にはススキもあった。また、古い神社は子供たちの歓声で賑やかだった。だとすれば、「かわいい子には旅をさせよ」を実践した両親、迎え入れてくれた両祖父母たちに感謝せねばなるまい。

友人に誘われて東京都写真美術館へ「今森光彦 にっぽんの里山」展を観に行ってきた。その印象からか、今年は特にこの詩が沁みる。

信州長野に「往生寺」という古刹がある。浄土宗の寺院で「安楽山菩提院往生寺」といい、本尊は阿弥陀如来、善光寺の奥の院にあたるそうである。小高い山門への道を上った辺りから眺める夕焼けが絶品で、〝ゆ〜やけ、こや

けで、ひがくれてえ～〃の「夕焼け小焼け」の舞台としても有名な寺である。これも私にとって欠かせない「唱歌」である。社会人としてスタートを切ったばかりの新人が、会社帰りのひと時を過ごした思い出深い場所なのである。二曲とも「里山」感覚でいえば『秋』のはずだが・・・

このところの異常気象下では、趣を感じさせる二十四節気も形無しというところか。せめて字面だけでも季節感を味わいたい。新暦での八月初旬の「立秋」を過ぎ、同じく下旬には「処暑」となり暑さも峠を越える候のはずがそうでもなさそう。九月初旬の「白露」には〃陰気やうやく重りて、露凝りて白色となれば也（暦便覧）〃とある。そして下旬には「秋分」を迎えることになる。

愁思　劉禹錫

自古逢秋悲寂寥　古より秋に逢うて寂寥を悲しむ
我言秋日勝春朝　我は言う秋日春朝に勝ると
晴空一鶴排雲上　晴空一鶴雲を排して上る
便引詩情到碧霄　便ち詩情を引いて碧霄に到る

『酔いの徒然』（一五〇）

丸山酔宵子

『小泉八雲の松江に行く』

８月の異常な酷暑の中、急遽、野暮用で大阪に行かなければならなくなり、新幹線で一泊の予定で向かった。

しかし、折角ならブラリと何処かに行こうかと、先月の「アララギ」の拙文「小泉八雲」を思い出し、「松江」でも行くかと、翌日の松江ホテルを予約したのである。

前夜のゲリラ豪雨の翌朝は、目が開けられないようなギラギラした太陽が照りつける中、大阪駅前のホテルを出発し、新大阪駅に向かったのである。

松江には、出雲大社、足立美術館等何回か行ったことはあるが、宍道湖のある松江に宿泊するのは初めてである。

Yahoo の乗り換えサイトでチェックすると、山陽新幹線で岡山まで行き、岡山で山陽本線に乗り換え、伯備線、山陰本線で松江と向かった。乗り換えは岡山での一回で、全て座席指定の快適な約３時間の汽車の旅である。

夏の盛りの太陽に照らされ輝く濃い緑の野山と川と渓谷を堪能しながら、中国地方を瀬戸内海から日本海へと、何とも痛快な縦断である。

トンネルを抜ければ眩い夏の碧

酔宵子

午後２時、炎天下の松江駅に到着。

早速、松江市内の観光スポットを巡る周遊バスで松江駅を出発し、旧城下町、松江城大手前、お濠の堀川を廻り、小泉八雲記念館そして宍道湖を眺め宍道湖大橋を渡り松江駅迄で、冷房は完璧、途中下車自由で、何と・・・５２０円。

松江城は慶長５年（１６００年）の関ヶ原合戦の後、その功績が認められ、出雲・隠岐両国を拝領した堀尾忠氏が、松江の地勢に魅入られ、この地に築城したのである。

山陰地方唯一の現存天守閣であり、国宝指定された５城（大山城、松本城、彦根城、姫路城）の一つである。

城門から緩やかな石段を登りきると、広大な庭園中に、ギラギラと照りつける太陽の中に天守閣が聳え立っている。敷地面積は日本で２番目の広さで、周りはお濠の堀

川に囲まれて、松江城を一周する「堀川めぐり」の遊覧船もある。

炎天の空に胸張る松江城

酔宵子

松江城下の堀川沿いは黒塀の古い武家屋敷が続いているが、その落ち着いた街並みにひっそりと、小泉八雲記念館がある。小泉八雲生誕１２０年、没後に開館以来８２年になる記念館であるが、２０１６年全面改修した。現館長は、小泉凡と言い小泉八雲の曾孫にあたる。

小泉八雲という当時では先端的な国際人である作家を知る情報を、遺愛品の展示と小泉八雲とゆかりの世界各地（ギリシャ、イギリス、アイルランド、アメリカ）を紹介している。

国際的に有名な建築家イサム・ノグチの父である世界的な詩人野口米次郎は小泉八雲を「預言者」と呼んでいたそうだ。それは、小泉八雲が西洋中心主義の偏見にとらわれることなく、オープン・マインドで明治日本の本質を洞察し、未来の日本へ提言したことに起因している。

小泉八雲記念館横には、小泉八雲の旧居が残されているが、その前の堀川沿いのバス停で周遊バスに乗り、城下町を廻って宍道湖へと向かったのである。

宍道湖は、周囲約４５㎞、全国で7番目に大きい湖で、わずかに塩分を含む汽水湖のため魚種が豊富で特に言わずと知れたシジミ。

松江に来たら矢張りシジミは食わねばと、Yahoo 検索で「松江・老舗居酒屋・シジミ」で検索すると、出てきました「季節料理やまいち」。

早速ホテルにチェックインし、シャワーでさっぱりと・・・いざ出陣。ホテルからタクシーで「松江新大橋の近くの「やまいち」をお願いします」と言えば、「何の躊躇なく、ハーイ・・」の一言。矢張り有名店なのだが、そのシジミ汁の大きさは普通の倍でそのミルキーな味は驚くほど味わい深い。

宍道湖の夕焼けを眺めての一献は、また、格別である。

宍道湖の大夕焼けやシジミ汁

酔宵子

夜が明けた

高橋育郎

夜が明けた
スズメが　チュンチュン朝の歌うたう
みなさん　おはよう　ごきげんいかが
きょうも　元気で行きましょう

昼は憩の　お昼寝時間
みなさん　ゆっくりお休みしましょう
それが元気　健康の元
病気知らずで　さあ行きましょう

お日さま　西にかたむけば
空はあかねよ　星が出た
一番星　みいつけた
夕焼け小焼け　カラスといっしょに　帰りましょう
遠くで鐘が鳴っている　平和を願う鐘の音よ

きょうも平和を　ありがとう
感謝をこめて　またあした
あしたも平和な世の中願っています

絹の話（167）

「アトリエトレビ」今泉雅勝

絹は遠くになりにけり

市井の絹事情

絹という言葉は一般には柔らかい、高級など共通のイメージを持っていますが、具体的な事になると絹への認識はそれぞれ大きな隔たりがあります。

昆虫少年や絹愛好家の様に非常に詳しい人がいる一方、ひと昔前なら全く考えられない様な絹を知らない人も増えて来ました。

絹と繭と蚕

絹を理解して頂く為に絹の原料である家蚕や野蚕の各種繭を展示して、この艶のある布はこの繭から作られるのです、と説明すると多くの人は理解して下さいますが、時々繭の中で音がするのはなんですか？この糸は何から出来るのですか？と質問する人がいます。中には乾燥した蛹が入っていますと説明したり、蚕という虫が吐いた糸ですと言うと、「ワア、気持ち悪い！」と逃げ去る若い人も増えて来ました。

糸を揚げる、績（う）む

繭から生糸を作る時は「糸を揚げる」と言います。麻を糸にする事を「績む」と言いますが、最近は殆ど「紡ぐ」で代用されています。

揚げた糸と紡（紬）いだ糸は同じ絹でも別物です。

真綿と木綿わた

昨今60才以前の方々に「真綿」とは木綿わたの上級品と思っている人が増えて来ました。

講演などで真綿は絹の綿であることは誰もが知っている事として話を進め、話をし終わって、受講者の中から「真綿が絹綿」であったとは58歳の今まで知らなかった！「目から鱗」などと感動して下さる方がいます。

その人はそれで感激されているので良いかと思いますが、私としては話の内容が殆ど理解されていない事になり、ガッカリする事が多くなりました。

そこで絹の話始めの時、受講者の一人に真綿を渡し、会場の皆さんに見える様に引き伸ばして頂き、それを皆さんに回覧し、その感触（柔らかさ、保温性、保湿性、弾力性、艶、繊維長）を共有して頂くのが最も早く絹を理解してもらえ、その後の絹の話がスムーズに進められ

る事が判って来ました。限られた時間の中でこのパフオーマンスはもったいない時間ですが、この作業をした方が受講者の注意を惹きつけ、会場が一つにまとまる事に気付きました。

私の幼少の頃は喉が痛くなると真綿を首に巻いてもらったり、木綿の布団綿を打ち直した時、綿切れを防ぐ為に真綿を布団大に引伸ばして包みかぶせるのを手伝ったりした事を思い出しますが、そんな風景を共有する年代の人は少なくなり、真綿はどこの家にでもある日常生活の必需品の時代は遠くになってしまいました。」

絹と洗濯

最近のお客様は絹製品の品質表示の「ドライクリーニング」表示を見て「絹は洗えない」と思っている人が増えています。絹を水洗いすると溶けてしまわないですか？と言う質問が多くなってきました。

絹は数千年来水洗いをして来ています。

私の小学生の頃までは着物は各家庭で水で「洗い張り」をしていました。

今では絹糸の作り方が進化して、着物以外の物でもツヤやしなやかさをはっきり出すため、糸のセリシン（お米に例えるなら糠の部分）を究極まで研ぎ落とすので、糸は保護膜を失い水洗いに不向きになってしまい、ドライクリーニングになったのかもしれません。それでも25℃～30℃位の水に中性洗剤で短時間押し洗いし、強く絞らず（洗濯機の絞り、乾燥は不可）、家蚕絹であれば日陰干し、野蚕絹（茶糸）は直射日光干しすれば痛まず、きれいになります。

絹とアイロン

アイロンするのを嫌がる人が増え、アイロンを持たない若い人も大勢になって来ました。現在の一般の衣料品は殆どパーマネント加工が施されている一方、シワシワのまま着るのもファッションとなって来ましたので、ますますアイロンが遠くの物になって行きつつあります。絹は湿度が必要な繊維で耐熱温度は２５０℃ですのでスチームアイロンをかけて艶を出して着てください。

絹と古着

絹の世界の生産量（生糸20万トン）は化学繊維（1億5千万トン）に比べて極めて少量です。

しかし絹は人の健康を守り環境維持に大いに寄与し、化学繊維が環境汚染、健康阻害を広げているのとは対照的です。古着になってもリユウスの方法を考え、最後には土に還る使い方を考えてみて下さい。

「江上浩二の独り言」82

江　上　浩　二

歴史・考古学が面白い①

最近の歴史は面白い。文字がなかった先史時代の遺跡や有史時代の遺跡が発掘されて、それらは数多くの最近開発された分析手法とそれらに紐解かれた分析結果を従来になかった社会的見地で、大胆な仮定が昔の姿だったんだという事を、納得させてくれるからだ。私は好きが高じて、所謂２次情報のみで、今回の独り言を呟いている。

素人歴史家・考古学好き人間なのかもしれない私は、受験で取り組む、特に世界史になるものが当時好きでなかった。ただ時間軸を古きから新しきものだけにした見方と単純に何年にどういう出来事があったとするだけの見方には、なじめず点数も及第点に届かず再試験もやった。

学生時代と記憶しているが、米国の南部の黒人家庭（アフリカから奴隷として連れてこられた）のルーツを自ら調べようとした本が出版されたころに、種々の科学的手法を適用し、時空を超えて戻ったり進んだりして、暴いて行こうとする姿勢が大胆で面白しろそうだと思った。あとは、サラリーマン時代にアイスマンという欧州のアルプスの峠越えのルートで５０００年前と思われる氷漬けのミイラが見つかり大騒ぎとなった事件を書いた単行本を買ってしまった。普段は古本購入で済ませているのだが、私が新版の単行本を購入してしまう位、衝撃的だった。

先ず自分の数少ない実体験からスタートしたい。子どもの頃の印象や大人になってから地元の社会活動グループを通じての実体験である。縄文貝塚が少し標高のある海から離れたところにあった。都内で古い神社は標高20数メートルに鎮座し、その坂下から縄文時代の幾重にも堆積した牡蛎の貝塚遺跡が見られる。青森・函館の縄文遺跡見学し、結構今の海岸線から離れていると不思議だった。

土器の再現焼成で、古代文化との関わり、組成の化学分析で判明。以降、考古学は最新の材料の微量分析技術、半導体の微細部解析により進む。

弥生後期の再現古代人の顔が母方の祖母・叔父さん（埼玉県在）にそっくり、関東北部群馬県の榛名山近くと記憶している遺跡の遺骨分析。次に、父方の従兄弟の顔・背丈が非常にそっくりで見知らない方が２００７年・オリンピック前の北京に出張で訪れた時に、タクシーから降りた際に街角で見かけた。本当に久しぶりと挨拶をしようとしまう位、似ていたことを実体験した。

続々と進む縄文遺跡・弥生時代の遺跡発掘

戦いに関する遺物がない縄文時代

12×35㎝単位（身体の特定部位の長さ）と規則性・数学の発達？

小さな子供を葬った甕の中に小石が１つ、２つと（三内丸山縄文遺跡）入っていたそうで、資料ではその点についてのコメントはなく、私は１歳で亡くなった子供・２歳まで生き存えた子供と直感した。

寒冷化による１万年以上続いた温暖な縄文時代の終焉と、急変する戦闘的弥生時代の環濠遺跡

吉野ヶ里遺跡の再発掘・傷を負った多くの人骨が甕棺墓に

氷河期と暖気、間氷期の暖期　海面変動と人や大型動物の移動

学説；太陽の活動（４００年前から黒点の出現数を観測）、11年の周期性の乱れと黒点数がゼロの年が続くと気温が下がり＊１、太陽の活動が活発な黒点数が多い時期は気温が

上がる。実は太陽が放射する光のエネルギーは、ほぼ変化せず、磁場の乱れと関係し、弱くなった太陽系圏の磁場を通り抜けた高エネルギーな宇宙線が悪さをする（大気中に小さなエアロゾルを形成し、それが雲の核となり雲が増えて日射量が下がる?）

氷河期と間氷期の長さ　地球の傾いている自転軸のコマ収差等は宇宙的現象。次の両先生方の論文を参照。
常田佐久教授・国立天文台
冨田成夫准教授　筑波大
＊１：マウンダー極小期

最近のDNAゲノム分析手法
ミトコンドリア（母親の系列のみ）以上に核のDNA（男系情報）のシーケンサーによる詳細解析。
仮説：縄文人のDNA（D1a）と現日本人のDNA、現生人類はいつ頃日本列島にやって来たか？
氷河期の３８０００年前に、アフリカを出発した現生ホモサピエンスは、アジア大陸へ、そして日本列島に到達。しかしスフール大陸・オーストラリアまで南下したGrが再度沿岸を北上したGrと途中でアジア大陸内で北上したGrが樺太経由南下して、列島に到達したと考える。これらの南方系Grと北方系Grが混血して縄文人として日本列島内外で活動したと思われる（D1aという男系縄文人DNAの呼称）。

篠田謙一氏　佐賀医科大　現国立科学博物館：発掘された人骨の歯を中心に解析詳しい日本列島人のルーツは？　に関する分析結果に関する多くのレポート。

氷層中のガス微量分析、環境変化（火山活動・７３００年前に大噴火し地盤沈降したカルデラを有する、現代人の工業化活動）を取り込む南極の氷層をサンプル。

Lidar 地中RADAR　：考古学　XCT MRIによる遺物のデジタルデータのＡＩによる解析
無人ドローンによる空中測量が暴く古墳や巨大遺跡

磨製石器と黒曜石の地理的関係と新石器時代を生き抜いた人類とは？
分布と旧新石器時代の人の交流
　九州の国東半島・姫島（学生時代）と信州和田峠（40代）の訪問

日本列島に見られる人為的痕跡のまとめ
ここではDNA分析結果で提唱されてるものを参照

１２７０００年前　砂原遺跡
３８０００年前　氷河期海面低下１００ｍ以上
１７０００年前　長江河口に住む倭人
１３０００年前　国産黒曜石の拡散
１００００年前　温暖化による海進と海面上昇
７３００年前　南九州アカホヤ大噴火
３０００年前　稲作文化を持つ民族の日本列島へ流入
西暦３世紀　寒冷化で北方民族が南下
西暦４世紀　空白の４世紀
西暦６世紀　これ以降は記紀の文字情報による

次号に続く

初狩便り（35）

花野みぷり

豊の秋

電車や車の車窓から黄金色に染まった田園風景に出会う時、なんて豊かで美しい祖国なのかと思う。

私たちの田んぼも黄金の時を迎えた。記録的な猛暑が続き、雨台風に襲われ、雀の猛襲にあい、水路の水漏れ対策に追われた米作りだったが、無事に稲刈りの日を迎えた。

たわわに実をつけた稲穂はその重みで首を垂れ、あたり一面が明るい。赤とんぼが飛び、鬼やんまは旋回を続け、蟷螂（かまきり）は大きく成長した。

この蟷螂は田んぼの脇の柿の木で産まれた。四月の中頃、曇り空で風の強い日だった。大人たちは農作業をしていた。突然、小学三年の男子が「かまきりが産まれてる！」と柿の木の下で大声をあげた。急いで行ってみると、蟷螂の卵は次々と羽化し、折からの強風で飛ばされていく。始めて見る蟷螂誕生の瞬間は忘れられない。

稲を刈っていくと稲株の根元にいた蛙が飛びだし、野鼠も逃げ出す。有機無農薬での米づくりは難しく、まだ課題も多いが生物多様性を大切にして、里山の景色を守り、仲間たちと楽しみながら農業を続けていきたい。

（写真・菅野昌英）

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言
https://hondachiro.exblog.jp/

2024年8月28日

腸内環境の重要性　ビフィズス菌

虫の鳴き声も　真夏とは違い
秋の虫が鳴くようになりました
身体も　そろそろ季節の変わり目に向けての準備です
以前から
腸の重要性について書かせてもらってきました
本田のひとり言　を読んで下さっている患者さんは
分かっているので前回に引き続き
上級編で行きたいと思います
3S+ゆたぽん+ヨーグルト+八分+湯船　でもある
ヨーグルトなんですが　大きく分けますと
ビフィズス菌　と　乳酸菌　に分かれます
ビフィズス菌は大腸にきく
乳酸菌は小腸にきく　といった感じです
今回は　ビフィズス菌　です

ビフィズス菌が不足すると
便秘　腰痛　イライラ　痔　大腸がん
などの問題が出やすくなります
ビフィズス菌は　大腸の深部　腸内フローラに滞在しやすいんです
なぜそんな深部まで??-?-と思いますよね
それは　酸素に触れると死滅してしまうんです
ということは　固形のヨーグルトで食べるのは
出したりしまったりするので
効果は出にくくなってしまいますよね
ということで　ビフィズス菌にかんしては
食後に飲料で早めに飲むことをお勧めします
本田カイロプラクティックの施術を
受けて下さっているなら効果は出ます
毎日　腸活　は欠かさずやりましょう
今日も笑いながら楽しんで行きましょう

2024年9月2日
ぎっくり系の季節

今日は久々の青空です
窓から入ってくる風も涼しく
虫の鳴き声も秋を感じます
いよいよ季節の変わり目です
今年も暑かったので
身体には少なからず負担がかかっています
ですので　ぎっくり系　に要注意です
まだ季節の変わり目本番ではないので
腰が抜けそう
朝起きたら　首が張っていて痛い
背中が固く　つりそう
などの症状が出やすくなっています
以前にも書きましたが
本田カイロプラクティックの施術を
受けて下さっている患者は
よほどの事がない限り　動けなくなることはありません
ですので　先ほどあげた症状が出た場合は
本来なら動けなくなるような身体の状態の可能性があります
ですので
引き続き　3S＋ゆたぽん＋ヨーグルト＋八分＋湯船を確実に習慣化してやってください
同じ姿勢を15分～30分以上はやらないうよにし
腕を肩から上にあげたり
ぶら下がっていきましょう
ラジオ体操も第一第二を続けましょう
今日も笑いながら楽しんで行きましょう

康鍼治療院（www.yasuhari.com）
玄　翁

「本音が力」

人は生まれた直後から
命の音を声に出す
本音（ほんね）は命の音であり
生命力の根源で
それを表し　交流し
内外（うちそと）　現実作り出す

本音を言葉に表して
命と言葉が合ってれば
言葉が力となりなりて
ありのままに生きれれば
内から力が湧いてきて
外を動かす力となる

本音をあらわすことをせず
命と合わない言葉にて
自分を表現していけば

自分の命が分からぬ故
内から力は生まれずに
身体（からだ）は停滞　外動かず

親や周りや常識に
合わせた　表現ばかりだと
命と言葉に差異が出来
どんどん命は萎縮して
命と違う現実が
作られ　命は弱ってく

本音の言葉を出す為にゃ
自らの内に　ある感覚
欲求・願望・思いなど
常に意識し言葉にせよ

一言一言　本音にて
命と言葉を　繋げて行けば
内外（うちそと）　現実　皆元気
本音を表す努力すりゃ
本音で生きる　道開き
未来へ進む　力となる

「耳とじんせい」

耳の感覚　生命の
根幹をなす　感覚器
生まれる前から　音を聞き
人生終わる　最後まで
耳から本能　働かせ
生きる場や先　把握する

この耳　腎が主り
腎の気　耳に通じてな
腎が蔵する　精と元気が
充実・調和　していれば
聴覚　正しく働いて
耳は五音を聞き分ける

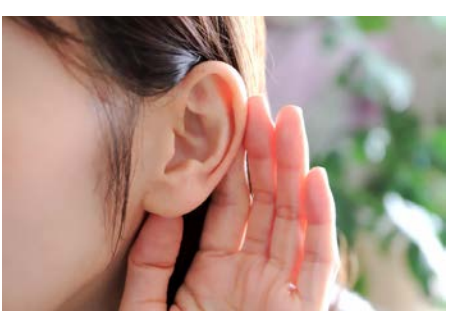
五音が示すは様々な
言葉の声や音のこと
言葉や音に乗せられた
声色・音色　含まれる
腎気がちゃんとしていれば

本能的に声や音
適切・的確　聞き分けて
人生正しく　進ませる

現代の生活　イライラや
頭目酷使を積み重ね
睡眠不足が続く故
腎精弱りて　人弱る
耳は遠のき　音からの
情報収集できなくなり
意識や本能　鈍ってき
人生　どんより曇ってく

耳の働き　落ちたなら
しっかり休んで　治療して
精の働き回復せねば
聴力一生わるいまま

耳は腎精が養いつつ
耳は人生を左右する



群飛赤卒

殿山木風

高閣の清窓　日昤に映ず
夕陽に群舞す　赤蜻蛉
童謡は自ら詠ず　詩吟の調べ
喜寿の征人　塵慮醒む

群飛赤卒　（令和六年）
高閣清窓映日昤　夕陽群舞赤蜻蛉
童謡自詠詩吟調　喜壽征人塵慮醒

（語釈） o詩題…群れ飛ぶ赤とんぼ。o清窓…清々しい、ここではクーラーの効いた窓の意。o日昤…太陽の光。昤は日の光。o赤蜻蛉…赤とんぼ。o童謡…ここでは童謡の「赤とんぼ」の事。o詩吟の調べ…詩吟の節回し。o征人…旅人。o塵慮…世俗の煩わしい思い。

（通釈） ホテルのクーラーで冷えた爽やかな窓辺は太陽の光に反射しており、そこから赤とんぼが飛び交っているのが見える。

童謡の「赤とんぼ」は童謡と共に詩吟の節回しで歌う。

吟じて喜寿を迎えた旅人は普段の煩わしい思いからすっかり開放された。

※　兼題を与えられ、あるシーンがうかんだ。函館に泊まった時の事だ。

然し、詩作中、それは晩夏の赤とんぼではなく、蝶々だった事に気付いた。そうだ、冬の蝶だったよな。何で赤とんぼになったのだろう。気付いても愉快な気持ちになった。

　実際のその時は、五階だったか、暖房の効いた部屋に寛ぐと間も無く、窓の景色に見入った。綿雪が遠く深々と降っていた。その内におかしな現象に気付いた。すぐ窓の近くではチョウチョウがふわふわと浮遊して、しかも何時までもその場に舞っているのだ。一瞬目を疑った。暫くして雪だと気付き、やっと、なるほどと気付いたのは、下から案配よく吹き上げるビルの風にのって空中に綿雪が浮かんでいるのだった。何時までもふわふわと蝶が舞っているのであった。実に不思議な光景だった。

　蝶もトンボも季節になったら網を持って、手製の箱をもってせっせと追いかけ回したものだ。如何に多く捕まえるか！最後は放つのだが、その時はもう飛べないものが沢山いた。

今となっては残虐な少年の頃の懐かしい思い出である。

　日暮れをば惜しんで飛ぶよ赤とんぼ

編集室だより【二〇二四年十月】

今泉由利

歌集「地球にて」

一九七八年

パパイヤの青き実のなる木のあり嬉しくなりてニカラグワにいる
あこがれの綿畑ある国にきて綿花白きを見ず通り過ぐ
初めてのニューヨークに雪の降りトップモード探す私に二児の従う
日本への旅の途中のニューヨークおむすび作らすレストランにて
幾度か飛行機乗り継ぎ辿り着くまず見るは東京の白き大根
あこがれつつ暮しておりぬ大根が店先にあふるこの東京を
強烈に肌を刺し来る光に慣れて今日は東京の冬の淡き日
沈丁花の蕾ふくらむ東京に死ぬほどうれしと吾が子らの言う
子供等のはしゃげる声を聞きながら富士ある景色にうろうろといる
大根が土よりのり出す畑続き日本にいるとつくづく思う
富士山の遍ねく見ゆる景色の中を二百キロにて走り過ぎゆく
日本の国籍を持つ吾が子にて山盛りにして金山寺味噌
朝毎に高山神社に詣でつつ吾が子の日本の二十日間過ぐ
鯛焼の焼ける順序を幼子と立ちて見ており雪ヶ谷の北風の中
寝起きする国に言葉も習慣も合わせて生きる幼子ふたり
アルゼンチンより早く帰れと呼ぶ電話耳になじまぬごとくに聞きぬ
餌代をおきてあずけ来し二匹の亀朝に夕べに子は思い言う
刈り株の乾きて連なる道をゆきわが飯を盛る陶を作らむ
窯脇に立つ足土間より冷え来つつ粒ある粘土の菊練りをする
硝子戸の鳴りつつ轆轤まわしをりざらつく土より皿の出来くる
暗きまで雪雲厚き日の午後を伊吹の麓の友に逢ひにゆく
雪雲の垂れたる伊吹に近づけり日本の旗のちぎれはためく
踏まえたる史実朧の琵琶湖にむき波だつ沖を見ているばかり

石焼芋を包み来たりて暖かき日本の新聞をしばらく読みぬ
琵琶湖なる鮒の洗いを噛みしめてウスバジャタのこと思いいだしぬ
高山神社の福豆を子等は撒かずして日本の鬼に逢いたしという
咲き続く薮椿一枝部屋に挿し垂れくる蜜の甘きも知りぬ
頼陽という造り酒まろまろし私の育ちし国にうましものあり
作業衣のポケットの中に隠し来しロッカーの鍵を思うこのごろ
雪柳の真白き満開を待たずして今は真夏の国へ帰らむ
凍る日と凍らざる日を確かめつつ洗足池の柳道毎日通る
黝き関東ローム層を馳けめぐり赤土の国へ帰りかゆかむ
芽ぶきいまだ柳の枝のゆれゆれて帰る日来たり帰りてゆかむ
御津より来て今グゥテマラの夕焼の下同じ時刻のめぐりめぐれる
グワテマラの伝説読みつつ立ち寄れる休火山つづく山脈(やまなみ)なつかし
夕焼のグワテマラ空港の束の間を火山の噴煙の動き見ている
天と地と境界線の見えぬままコーヒー飲みおり二万メートルの空に
椰子の木をシルエットに見る道をゆきパナマの国に一夜眠らむ
芒の穂ほほけてなびくカンポ見え我が住むアルゼンチンの上空にいる
乗り継ぎて飛行機の旅今終える自らの場所に雨畑の硯あり
長々とわが肢長き心地して異国に慣れしを寂しく思う
三ヶ月の留守に伸びたる伸びぬ木をこの新秋より見つめてゆかむ
黄金(おうごん)の実の木に棘を確かめて枳殻の匂い思いきり吸いぬ
体温の伝わり出来るうどんありと長き年月思いていたり
スペイン語の教科書を読む声聞えきて吾が子の夏の休暇終りぬ
ひと夏を冬の日本に過し来て私にほほけたる芒吹く風
綿の産地グワテマラ国を通り来て腰にまとうは人型絵絣
流れゆく水に沿いつつ歩みきて野菊があればひと休みする
握り飯を頬張る我らの近くに来て水飲む馬あり川は流るる
穏やかなるコルバドの山を見ておりぬ去年とは違う思いを持ちて

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一五〇-〇〇一三
東京都渋谷区恵比寿三-四五-三
フォーレストヒルズ三〇二
ケイタイ　090-8434-8646
TEL　03-6765-5838
◇URL　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。
三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和六年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行　今泉由利